

アート思考入門 (7)

難民が先生、マックが大学に

イノベーションを生み出す「アート思考」は社会課題の解決にも役立てることができる。ドイツで行われた移民・難民への理解を進めるプロジェクト「マクドナルドラジオ大学」の例を紹介したい。

2017年3月、独フランクフルトでマクドナルドの店舗を教室に見立て、母国では高い学歴を持つ移民・難民がラジオを通じて様々な分野の専門的な講義をしたのである。主宰したのは、アーティストで演劇の演出家の高山明氏。同氏は劇場ではなく街に飛び出して、虚構の世界を創るというコンセプトを実行している。「街で構築した虚構世界が鏡となり、現実世界がいつもとは違って見える」ことが狙いだ。同氏がもう一つ注目しているのは多様性である。様々な意見を受け入れない社会は思考が硬化してしまう。いかにばらばらな乱数的世界を創るかが自分の役割だと考えているという。

「マクドナルドラジオ大学」では、多様性の対象として移民・難民（マイノリティー）に焦点を当て、架空の大学という虚構世界の中でマイノリティーと一般の人とが出会う場を提示したのである。

このプロジェクトは高山氏の実体験に基づく。当時、ドイツに在住しており、シリアやアフガニスタンから押し寄せる難民の問題を目の当たりにしていた。彼らに直接話を聞いたところ、祖国ではプロフェッショナルな仕事をしている人や国際大会に出るようなスポーツ選手もいた。しかし、ドイツに来ると専門性を生かせない仕事

にしか就けず、不遇な立場に置かれてしまっていた。

一方、難民たちはドイツに至る移動の過程でマクドナルドを情報交換の拠点としていることもわかった。マクドナルドでは食事をとることができ、Wi-Fi（無線LAN）も使える。多様性に対する許容度が高い企業であり、難民たちを排除することもなかった。

そこで高山氏は、ドイツで移民・難民の立場を逆転させ、祖国のように振る舞える仮の世界をマクドナルドに作ろうと考えた。15人に建築や哲学などの話をしてもらい録音、マクドナルドでハンバーガーを食べながら講義を聴けるようにした。

普段はマクドナルドに行かない人もこの企画には興味を持ち、店舗に出かけて移民・難民の講義に耳を傾けた。彼らが目をそむけてしまう移民・難民の現実を知ってもらうことができたのである。

大きな話題となり、ベルリンでも実施したほか、日本のマクドナルドでも何回か行われた。

移民・難民も私たちと同様、それぞれの経験がある。劇場で演劇を見て気づくことも多いが、街中で虚構世界を体験する方がはるかに共感を集めることができる。

高山氏は「演劇を見たい人が劇場に集まってコミュニティが生まれるのではなく、都市機能を設計するように、ある種のアーキテクチャー（建築物）を設計するようなことに興味がある」と言う。演劇というコンセプトを大きく変貌させた事例である。

このプロジェクトには、難民問題に対する「思考の飛躍」、マクドナルドを動かした「突破力」、

共感を集める「私の世界観」のアート思考の3つの要素が詰まっている。この3要素がそろうと、社会変革を促す大きな力を生むことができるのだ。

難民・移民によるマクドナルドラジオ大学での講義例
・シリアの建築家「廃墟の未来の都市計画」
・シリアの食文化専門家「シリア料理に基づく料理の社会的統合」
・シリアのミュージシャン「避難所としてのラップの可能性」
・イランの産業ダイバー「人生で最大のリスクは何か」
・エリトリアの会計学教授「難民の起業家精神と内部管理会計」
・ブルキナファソのストラテジスト「都市空間における生存戦略」
・アフガニスタンのビジネス学者「マルティン・ハイデッガー（哲学者）の講義を読む」

(出所)公式サイトプログラム